

エチオピアで学んだこと

坂下幹弘

(平成 20 年度 1 次隊 PC インストラクター エチオピア)

みなさんこんにちは。よろしくお願ひします。埼玉県立坂戸西高校からまいりました坂下幹弘です。今日は、特別な発表の資料を作れなかったので、総合学習で用いた生徒向けの資料になってしまふんですが、25 分間お付き合いいただければと思います。よろしくお願ひします。恐縮ですが座って私も進めさせていただきたいと思います。失礼します。

それではまず初めに、お聞きしたいんですが、教員の研修ということで先生方いらっしゃると思ふんですが、高校籍の先生いらっしゃいますか。あ、3 人、ありがとうございます。次に、コンピューター関係、PC 関係の方いらっしゃいますか。あ、いらっしゃいますね。次に、エチオピアに派遣される予定だという方いらっしゃいますか。エチオピアはいない、と。アフリカに行くという先生、いらっしゃいますか。いらっしゃいますね。既婚でお子さんもいらっしゃるという方、いらっしゃいませんね。あと、埼玉県からいらっしゃった先生いらっしゃいますか。いませんね。どうもありがとうございました。

それでは始めさせていただきます。後ろの写真ですが、ゴンダール城とってエチオピア、アフリカにあるんですけど、世界遺産というのがやっぱりいくつかありました。先ほど、十字架の建物がやはりラリベラといいまして、世界遺産になっています。内容ですが、1 から 8 まであるんですけど、もう皆さん方、派遣される予定だということで、途中、省略しながら進めさせていただきたいと思います。

まず、自己紹介ですが、この写真は私がエチオピアにいる時に撮った写真です。当時はひげをはやしておりました。教員生活 15 年目で参加しました。それから、コンピューターの隊員ですが、私はもともと英語の教員でコンピューターの専門家ではありません。コンピューターの知識は 15 年間の仕事を通して独学で学びました。それから英語の教員なので海外での生活を長年夢見ていました。

卒業と同時に教員になってしまいましたので、なかなか長期間、海外で生活する方法がなかったため、協力隊へ最後の最後で挑戦したということになります。エチオピア着任当時は私より年配の隊員がいたのですが、1 年過ぎたころに帰国され、私が 38 歳で当時、隊員最年長でした。

それから、私は結婚していて、妻と子供を残しての単身赴任でした。現在は、任国外旅行の行き先の 1 つとして、日本に帰国可能な制度がありますが、私が派遣されていた当時は日本には帰国できなかったもので 2 年間妻と子供とまったく会えませんでした。それから、ご存知の通り、派遣希望国を 3 つ書けますが、エチオピアは希望外でした。エチオピアの

「エ」の字も書いてなかったので、覚悟していない場所に行ったわけです。ですから、とても不安がありました。次の、「協力隊についての説明」は省略したいと思います。

このスライド写真は、20年度1次隊で、埼玉県から一緒に隊員として派遣されたメンバーです。とても女性が多いのに驚きました。男性が6人しかいないということで、女性の方が積極的に世界に出て行っているんだな、途上国に行っているんだな、と驚きました。「JOCVについての説明」も省略させていただきます。

次の写真ですが、「技術補完研修」というものが、派遣前にあり、コンピュータ系の隊員は銀座の内田人材開発センターさんにお世話になりました。次の報告で、エルサルバドルに行かれた中村先生も発表されるのですが、中村先生もこちらに一緒にいます。一緒に技術補完研修というのを受けました。「参加への道」という説明も、これは生徒向けの資料ですので、「健康第一」ということで、省略します。

次に、エチオピアという国の紹介をしたいと思います。エチオピアってどこってことですね。日本がこのへんにあると、ここが、東アフリカという地域です。拡大しますと、いくつか国があるんですが、このあたりです。この写真はエチオピアで一番歴史があるアディスアベバ大学です。ここにぼろぼろの洋服を着た少年がいて、靴磨きをしていますが、一方で、この様ないい格好をして大学の卒業式をリッチにやっている、非常にギャップを感じました。

エチオピアの紹介ですが、首都はアディスアベバ、面積は、日本の3倍、人口はナイジェリアに次いで2番目で、わりと大きい国です。国土のほとんどが高地、標高2000mくらいになります。気候はとても快適でした。暑くもなく寒くもなく。公用語はアムハラ語、英語になります。

それから、エチオピアには、こういう場所もあります。「シェラトンホテル」という場所ですが、外国要人等が泊まるホテルです。こういう立派な建物もあります。続いて、首都アディスアベバの様子です。そうかと思えば、南部の方に行くと部族もいます。これは「ムルシ族」といい、唇を切ってお皿を入れる部族ですが、この様な人々も住んでいるという写真です。

マーケットでは、こういう場所でも貨幣経済が成立しています。

エチオピア人について簡単に説明をしたいと思います。まずエチオピアという国ですが、歴史が長いです。紀元前2000年くらいから、国家が存在したといわれています。アフリカ唯一の独立国で、植民地経験がない、短期間イタリアに侵略を受けたことがあります。その関係でエチオピアは第二次世界大戦の戦勝国であると人々は思っています。人々のプライドが高いです。「おれたちは他のアフリカ人と違う」と、多くの人々は思っています。この辺りは省略したいと思います。

次に、エチオピアで驚いたことを何点か紹介したいと思います。まず「時間の概念」が全く違うということです。これは2年間生活していて、最後まで慣れませんでした。エチオピアには「エチオピア歴」という独自のカレンダーがあり、1年が13か月あります。1月1日が9月11日になります。「エチオピア時間」というのもあり、現在の時刻、午後3時20分くらいですが、エチオピアでは9時20分とまったく違った言い方をします。日本との時差がちょうど6時間なので、日本時間を想像すると「エチオピア時間」が出てきます。

あとは停電・断水・電話断線ということで、インフラが非常に貧弱で、コンピュータ隊員だったため、とくに停電には苦しめられました。

それからマラリア・感染症・ノミ・ダニなど、衛生的な問題もありました。病院もあまりあてにならないと思います。病院に行くと悪化してしまうことがあるかもしれません。それから挨拶がとても長く、間違い電話がかかっても5分くらい話していることもあり、驚きました。20分くらい「最近どうした」「何やってるの」という形で挨拶が続くことがあります。

もう少し驚いたことを。人々がとても信心深いです。宗教の力だと思いました。でも嘘をつく人もいました。それから文化的に日本と似ているものもありました。たとえばお辞儀とか、年長者への配慮、気遣い等ということです。日本人はかなり若く見られるようで、私は当時37歳でしたが、28歳に見えたそうです。なので、初めは同僚教員とかが、ラフな形で話しかけてきたのですが、私が、「37歳で妻も子供もいるぞ」、と言ったら、「何だお前のが年上なのか」と、急に態度が変わり、驚きました。

独自の文字ですが、こういう文字を使っています。「アムハラ語」では、まったく何が書いてあるかわからない、こういう文字を使っています。これなんて書いてあるかという、英語訳がこうなります。英語だとすごくわかるなって、思いますよね。

慣れてしまったことですが、エチオピアではバスによく乗りました。満員のバスの中はすごく暑いです。なので、窓を開けると、「閉めろ」って、周りのお客さんから言われます。「なぜだ?」、と聞くと、「風邪をひくからだ」と、言われ、「おかしいんじゃないか?」と、もう理解できませんでした。

ただ、実体験から学ぶと、エチオピアの季節は、雨季、乾季、小雨季の3つがあり、雨季は雨がたくさん降るのですが、乾季はすごく乾燥します。自分自身、乾季の時、風邪で一週間寝込みました。のどがすごく痛くなったのです。マラリアと思ったんですけど、蚊に刺されていない。「なんでだろう?」と、思ったら、この写真が道路の状況なんですけど、エチオピア人の考えによると、未舗装路が多く、家畜の糞がたくさんあります。糞のなかには細菌がたくさん含まれ、乾燥すると土埃が立ち、それを吸い込んでしまう。だからバスで土埃を立てながら窓をあけて走るとそれを吸い込んで、「風邪をひく」と、そういう考えに基づいているようです。

同任地に、風邪ひき、肺炎になった隊員もいました。やはり、同じ症状でしたが、埃を吸い込んだためではないでしょうか。こういう道路でヤギとか普通にいて、ヤギくんが「糞」をそこら中に、写真後ろには、「牛」も見えますけど、そういうことで、現地の人々の考え方というのも一理あるのかな、と納得できました。この写真はアワサ高校の同僚教員です。

もう1つ、エチオピア人は、学校とか仕事を休むことが多いです。「どうして休む？」って言うと、「I was sick」と、答えます。また休んで、「I was sick」と、答えます。この写真は、私が住んでいた家です。ある日、借りていた家の大家さんが約束破りました。「どうしてだ？」と、聞いたら、「I was sick」と、答えました。大家さんは英語がわかったので「何でだ。仮病なのか？」と、聞きました。この写真は、雨季の様子ですが、雨がもうものすごく降っています。エチオピア人の実状ですが、雨季はすごく雨が降り、水たまりができます。水たまりは蚊の大量発生につながり、その結果、マラリア感染の可能性が高まるということです。マラリアというのは、恐ろしく、感染すると、急激な体力消耗が起こり、死んでしまう場合もあります。実状は医療技術が未発達、高額な医療費ということで、最善策は、「休養」ということです。「疑わしきは休め」ということで、エチオピア人はマラリアの可能性もあるため、何か体調不良があるとすぐ休むことがあります。このことも、現地の人々の考え方で、私はマラリアにはならなかったんですけど、アフリカへ行く方がいて、マラリア感染の可能性のある方は、「休むのが一番」です。ということで、現地の人々の考え方の紹介でした。

活動の紹介です。この写真が私が活動していたアワサ高校の入り口になります。活動についてですが、概要を話すとこういう風になります。「IT 教員としての実践的な授業の担当、PC・環境整備、同僚教員の育成」が、要請内容でした。対象はグレード 11 から 12、ちょうど日本の 17 歳から 18 歳で、高校 2 年生から 3 年生です。全校生徒は約 6000 人、教職員数 200 人というとても大きな学校でした。次の写真ですが、これがコンピュータの実習教室です。私が行った直後、ではないですね。行ってしばらくたってからですね。後ろに私が作ったものが貼ってあるので。こういう環境です。ごみが散らばってイスがばらばらになっています。こういう使い方をしているところでした。

この写真は、任地アワサの様子です。次は、授業の様子です。ひとクラス 80 人いました。80 人でコンピュータが 15 台くらいでしたので、80 人のクラスを半分に分けて、40 人で 15 台を使ったので、大体 2 人から 3 人くらいで 1 台を使いました。こんな形で授業の方を進めて行きました。

これは図書館です。これは座学の授業です。着任当初は、コンピュータがまったく動かず、とりあえず、「ネットワークに関して座学をやってくれ」と、言われました。生徒は、一応英語がわかるというレベルなんですけど、私は、英語の教員なので、彼らがどれくらい英語をわかるかっていうのが、あやしかったです。ですから、黒板に書くのも時間かかるので、当初はプロジェクターを使って能率良く授業を進めて行きました。この写真の様な

生徒たちと一緒に。次は、また実習室の写真ですね。

活動上の問題ですが、こんなことがありました。まずひとつは、何かコンピュータの技術を移転して行こうとしました。一生懸命やったのですが、熱心なエチオピア人 IT 教員が、一人いたんですが、結局いろいろメンテナンスのこととかを彼に教えたのですが、結局そういう意欲のある先生は転職してしまいました。「せっかく教えたのにやめちゃったのか」と、がっかりしました。

あと、予定通り進みません。エチオピアでは「教職」というのがすごく人気がありません。日本だと学校の先生は「聖職」、「Holy Job」と、言うんですかね、「聖職者」ということで評価が高いのですが、エチオピアで、「おれ日本で先生やってんだぜ」と、言う、「なんだ、お前教員にしかねれないのか」と、そういう評価を受けます。現地の教員は学校にこないことも多いです。

それから 2 年という限られた期間でした。現職の先生方多いので、ご承知だと思いますが、「じゃあ、学校にある様々な課題を先進国日本で、二年間でどれくらい解決できるか」と、言う、なかなか解決できないっていうのが実状ですよ。ですから、さらに過酷な環境の途上国で「2 年で結果を」と、いうのはすごく短い期間だと思います。

それから、エチオピアでは、教職がすごく人気がないので、教員不足が深刻でした。私は、英語が普通にしゃべれたので、「これはいい、ただで働く先生が来た」ということで、いきなり着任直後からエチオピア人の教員と同じ授業をやって欲しいと、言われて、すごく忙しかったです。コンピュータも直しながら授業もやらなくちゃいけないということで、時間に追われる補充教員という立場でした。そのため、IT 教員としての自分の活動に疑問を感じる時期がありました。それはなぜかと言うと、カウンターパートが遊んでいるんですよ。私が一生懸命授業やったり、チームティーチングで授業やると、もう一人は「ちょっと、おれ用事あるから出ていく」と、どっかで友達と話して遊んでいたりました。「俺、本当にここでやっていていいのかな」と、思う時期がありました。

ただ、「希望の光」も見えました。活動 2 年目くらいから考え方を換え、「何かをやってみよう」という気持ちを捨てました。一緒に働く時に、「本当は能率悪いのだけど、でもまあちょっと付き合ってみるか」、みたいな感じで、時には、彼らのやり方でやってみることもありました。それも大事なんだなと思いました。

あと、教員とかカウンターパートをあてにしないで、生徒の方に期待をするように考え方を換えました。そうしたら、少しエチオピア人の方も、私に気を遣ってくれるようになったのか、少し意識が変わってきました。掃除をするようになったり、新しい技術を使いだしたりとかが、ありました。離任の時に送別会をやってくれて、本当に涙が出てきました。たとえば、私が着任した時、まず、実習室の掃除を一所懸命やっていたのですが、そういう活動をはじめは「やれよ」という態度で、言っていました、それを言わないよう

にしたら、この写真の様に、掃除をやってくれるようになりました。

プロジェクターを活用して発表するのも、私がやって「これ良いからやれよ」と言っても、なかなか真似してくれなかったんですが、2年目になって、「まあいっか。彼らは使えないんだよな」と思っていたら、少しITの先生がそういうことを真似してくれるようになりました。あと最後に、送別会をやってくれて、こんな形で「ありがとう」と、いうことで送り出してきて、忙しい中、先生方が集まってくれ、すごく感動しました。

エチオピアで学んだことですが、途上国にも課題があるように、日本にもたくさん課題があると思います。その日本が抱える教育の問題、例えば、「誇りが無い」、「不登校」、「いじめ」ですとか、こういう問題が、実は、私が活動していたアワサ高校には、あまり見られませんでした。エチオピアに、そういう課題の答えがあるのかな、と感じました。ですから、ここにいる先生方には、日本から何かを伝えるだけでなく、現地に行かれた時に、日本の教育課題の答えになるようなものがあるはずなので、それらを見つけてきてくれればと思います。

協力隊の経験ですが、辛かったことは、「二年間家族と離れ離れになったこと」です。楽しかったことは、「色々な人々に出会えたこと」です。協力隊での経験はとても素晴らしいものになると思います。帰国して感じたことですが、途上国で2年間やれたので、「日本でも絶対やれる」、という自信ができました。それと健康面も含めて自分の「しぶとさ」も発見できました。「何とかなる」という気持ちですね。あと、「家族の大切さ」、さらに、「様々な人々の支え」を実感しました。つらく大変なこともありましたが、それ以上に楽しいことも、本当に多かったです。この写真は、坂戸西高校、私の所属先の学校の先生方が送ってくれた救援物資ですけど、色々と食べ物以外にも、古くなったサッカーボールですとか、バスケットボールですとか、そういったものも配属先であるアワサ高校へ送ってくれました。

最後ですけど、日本という国は「人材」が大切なんだな、「すごいんだな」と、感じて帰ってきました。

協力隊の任期は二年間、二年後は日本に帰ってきて仕事するので、協力隊事業というのは、人材に対する投資で、国益に結びつくものだと思います。広い視野を持ってくれということで、生徒には話をし、最後に、活動をしていく上で10個の「あ」ということを伝えました。これはエチオピアにいた調整員から教わった言葉ですが、配布資料に同じものが載っているので、確認していただければと、思います。それから、最後の言葉ですけど、これも現地の調整員から教わった言葉です。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」と。やはり、「教えてやる」という気持ちで活動するのではなく、「現地で何かを教わってくる」という、謙虚な気持ちを持って活動をされると上手くいくのではないかと思います。

ちょっとまとまりませんが、言いたいことが、いくつかあるので、最後まで少し言わせてください。まず、現職教員の先生方の待遇面を確認してください。待遇面と言うのは日本での待遇面です。例えば、私は、住宅ローン等がありましたが、日本に居住していないと、「住宅ローン控除」が受けられないとか、「定期昇給」が停止されるとか、「期末勤勉手当」が減額になるとか、各自治体によって違うと思いますが、職場の待遇面を確認した方がいいということです。二点目として、派遣国と「スクールイヤー」が違います。日本は4月から始まって、3月に終わりますが、外国はほとんど9月から始まって4月に終わるということです。なので、何か所属校と交流事業をやるときには、「スクールイヤー」のギャップを確認しておくといいかと思います。長くなりましたが以上で終わります。

【質疑応答】

質問：私も来年度 PC インストラクターとしてウズベキスタンに派遣される予定です。派遣にあたって、技術指導というのが行われるということですが、その具体的な中身とか期間というのは人によって違うものなんですか。

先生：技術補完研修では、コンピュータ系の隊員であれば、同じ内容の補完研修を受けることになります。配属先の要請内容によっては、研修後半の内容が免除されることもありますが、基本的に同じ内容で同じ期間研修を受けることになります。